『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.7（2011）

研究ノート：英語の関係代名詞に関する一考察
—David Crystal の“performance lectures”を資料に—[1]

浦田　和幸
（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

要　旨

一般に，英語の関係代名詞の用法には文体差が見られる。小論では，イギリスの英語学者 David Crystal の一連のパフォーマンス講演を話しことば資料の一種として，関係代名詞の用法について調査した。その結果を，クリスタルの何種類かの文章における場合，さらに，原稿を読み上げるタイプの講演の場合と比較し，同一人であっても，使用域によって関係代名詞の用法に相違が見られることを示した。

1. はじめに

英語の関係代名詞の用法には文体差があり，同一人であっても，使用域 (register) によって相違が見られることが予想される。小論では，イギリスの英語学者 David Crystal (1941-) の所謂 “performance lectures” を主な資料として，関係代名詞の用法について検討する。

“performance lectures” （仮に「パフォーマンス講演」と訳しておく）とは，原稿なしで，手振り身振りを交えてユーモアたっぷりに，また，時に声色を使い，聴衆との一体感を保ちながら，リラックスした雰囲気の中で行われる学術講演を指している。クリスタルの説明を下に引いておこう。(Crystal 2009: 2)

> And no script, either, for these lectures were not written down. They are what I call ‘performance lectures’. They are events in which the lecturer speaks spontaneously and at times dramatically, but in a pre-planned and structured way, about a subject. There are no notes, no handouts, no slides, no PowerPoint. The audience focus is entirely on the speaker, and the speaker focus is entirely on the audience. The aim is to achieve maximum speaker-listener rapport, without distraction. This can’t be done if half the audience’s attention is on a handout or a screen. It certainly can’t be done if they find themselves having to cope with PowerPoint karaoke.

[1] 本研究は科学研究費補助金（基盤研究 A）「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」（課題番号 19202015）の補助を受けた。

The analogy is with the actor on stage – or, perhaps more accurately, with the stand-up comedian. However, the subject matter is different: the topics are factual and intellectual rather than fictional and comedic – though this is not to say that playful creativity and laughter are ruled out.

クリスタルは，独演喜劇役者 (stand-up comedian) と見紛うばかりに，演技を交えつつ，ユーモアたっぷりに言語について語っているのである。*The Future of Language* (2009) と題して，DVD と解説書が一体となって出版された講演集には，以下の 3 つの講演が収録されている。（講演は各約 60 分）

The Future of Language: The Routledge David Crystal Lectures
Lecture 1: “The Future of Englishes” (FE)
Lecture 2: “Language Death” (LD)
Lecture 3: “Internet Linguistics” (IL)

用意した原稿を読むタイプの講演 (scripted lecture) とは趣を異にし，雰囲気の点でも口調の点でも，日常の話し言葉に近いという印象を受ける。小論では，まず，パフォーマンス講演の中で関係代名詞がどのように用いられているかについて検討する。

2. パフォーマンス講演における関係代名詞の用法

クリスタルのパフォーマンス講演における関係代名詞の生起数は，制限用法と非制限用法に分けると，下記のとおりである。（なお，調査対象としたのは，クリスタルがパフォーマンス講演の中で自ら語る言葉に限り，基本的に引用箇所等は除外した。）

表 1　関係代名詞の生起数：制限用法 vs. 非制限用法

制限用法	256
非制限用法	37
合計	293

制限用法が 256 例に対して，非制限用法は 37 例であり，前者がはるかに多い。一般に，関係代名詞の用法上の文体差は制限用法におけるほうが顕著であるので，以下では制限用法に的を絞って検討したい。

制限用法の 256 例のうち，所有格の whose が用いられた例 (“... any of the languages **whose** literature we know well.” *LD*) が 1 例のみあった。これを除いた 255 例について，先行詞が人 (personal) の場合と，人以外 (non-personal) の場合とに分けて，関係代名詞の使用状況を見ていこう。

関係代名詞は *wh*-語 (who, which) か that であるが，省略される場合は「ゼロ関係詞」と呼ぶことにする。（以下，表と例文中では <zero> で示す。）

関係代名詞は，関係詞節内で，主語 (S)，述語動詞の目的語 (O.v.)，前置詞の目的語 (O.prp.)，補語 (C) のいずれかの働きをする。

2.1. 先行詞＝人（personal）の場合

先行詞が人の場合，関係代名詞の分布（生起数）は以下のとおりである。

表 2　制限用法：先行詞＝人の場合

	who	that	<zero>	
S	38	3	0	41
O.v.	1	0	7	8
O.prp.	0	0	1	1
C	0	0	0	0
合計	39	3	8	50

補語の例はなかった。以下，関係代名詞の働きごとに，主語，動詞の目的語，前置詞の目的語の順に見ていこう。

2.1.1. 先行詞＝人：「主語」の場合

先行詞が人で，関係代名詞が主語として機能する場合は，who が 38 例と圧倒的である。代表的な例を 1 例挙げておく。（以下，例を挙げる際は，原則として，先行詞の主要語は下線で，関係代名詞は太字で示す。）

(1) The people **who** adopted English in these countries then said they would adapt it. (FE)

先行詞が人の場合，文法上は that を用いることも可能であるが，クリスタルのパフォーマンス講演の中では，その生起数はわずかに 3 例であった。以下を参照。

(2) And he thinks he's the only person in the world **that** likes blue bottles. (ID)
(3) You're in the chatroom, and down the screen are scrolling messages from all the other people **that** are in the chatroom, all over the world, maybe, you don't know where they are. (ID)
(4) And there are examiners and examining boards **that** are extremely worried about the way in which all these abbreviations are turning up in exams and about the low grades that the kids are getting as a result. (IL)

(2) と (3) については，波線で示した修飾語句に注目したい。(2) では先行詞が ‘the only’ (唯一の) という限定的な意味の語に修飾され，(3) では ‘all the other’ (他のすべての) というやはり限定的な語によって修飾されている。このような場合に，関係代名詞として that が好まれる傾向にあることは，学校文法や記述文法でしばしば指摘されるところである。[2] 元来は指示代名詞から発達した関係代名詞の that は，疑問詞から発達した *wh*-語（ここでは who）よりも限定性が強いのであろう。

一方，(4) では，‘examiners’ (試験官) と ‘examining boards’ (試験委員会) が先行詞である。前者は明らかに人であるが，後者の表現中の ‘boards’ (委員会) は，ここでは構成員としての人よりも，むしろ組織に重点を置いてとらえられているのであろう。したがって，先行詞が人と人以外のものから成るため，関係代名詞は who や which ではなく，有生性 (animacy) に関して中立の that が選ばれていると解釈してよかろう。（あるいは，近接性の原理 (principle of proximity) により，2 番目の先行詞の ‘examining boards’ に合わせて that が用いられているのかもしれない。）

2.1.2. 先行詞＝人：「動詞の目的語」の場合

表 2 で示したとおり，関係代名詞が動詞の目的語として機能している場合，ゼロ関係詞が 7 例，そして，本来は主格である who が目的格として用いられた例が 1 例あった。ちなみに，現代英語では一般に堅苦しいと考えられている目的格 whom の例は皆無であった。

ゼロ関係詞の代表的な例を 1 例，また，who の 1 例を次に引用する。

(5) When I was last there, a couple of years ago, I asked <u>everybody</u> **<zero>** I met, “How many people do you estimate speak English in India now?” (FE)

(6) In many parts of the world, there are organizations, governments, who are concerned to crush <u>minorities</u> **who** they feel to be a threat to their own survival. (LD)

(5) は通常の用法である。(6) の who は feel の目的語であるため，文法的には目的格として機能している。whom を避けて，代わりに who を用いることは，会話体には見られることである。[3] （あるいは，feel は，引用例のように目的語の後に不定詞句を従える構文以外に，“<u>minorities</u> **who** they feel are a threat to their own survival” という構文をとることも可能であったため，格を混同して主格の who が口をついて出たと考えることもできよう。）

---

[2] Cf. 安藤 (2005: 187)：「先行詞が最上級の形容詞や，the first, the last, the only, the very のような最上級の類義語に修飾されている場合」や，「先行詞に all, every(thing), any(thing), some(thing), no(thing), none, little, few, much などの数量詞が付いている場合」など。

[3] Biber et al. (1999: 614-615) は “While *who* can also occur with object gaps, this option is rare (and stigmatized in written texts)” と述べたうえで，会話体における生起例として，“There’s a <u>girl</u> **who** I work with who’s pregnant.” を引用している。

2.1.3. 先行詞＝人：「前置詞の目的語」の場合

以下の 1 例のみ見られた。（前置詞の部分は囲みで示す。）

(7) What feedback am I getting from the person **<zero>** I'm sending the email to?

ゼロ関係詞が用いられ，前置詞は文末にある。（なお，前置詞と関係代名詞の位置に関しては，先行詞＝人以外の場合を扱う 2.2.3.で検討する。）

2.2. 先行詞＝人以外（non-personal）の場合

先行詞が人以外の場合，関係代名詞の分布（生起数）は以下のとおりである。

表 3　制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	33	64	1	98
O.v.	1	44	39	84
O.prp.	10	6	6	22
C	0	0	1	1
合計	44	114	47	205

2.2.1. 先行詞＝人以外：「主語」の場合

先行詞が人以外で，関係代名詞が主語として機能する場合，ゼロ関係詞が 1 例あるが，それは特殊であるため最後に触れることにし，まずは which と that について確認しておきたい。

which が 33 例，that が 64 例あり，比率的には that が which の約 2 倍の頻度で用いられている。一般に，文体の点では，which はよりフォーマル，that はよりインフォーマルとされている。クリスタルのパフォーマンス講演においては，that が which よりもかなり多く用いられている点に注目したい。Biber et al. (1999:616) は，which は学術的文章で好まれ，that は会話や大抵の現代小説において好まれるという結果を示している。[4] 言語に関する学術的内容を扱うクリスタルのパフォーマンス講演は，この点に関する限り，会話体により近いということがいえる。

では，which と that の例を 1 例ずつ挙げる。ともに，'language' を先行詞とする文であるが，関係代名詞の使い分けに関して特に有意な差は観察されない。

[4] Cf. Biber et al. (1999:616): "Stylistic association is another important factor, leading to marked register differences. *Which* has more conservative, academic associations and is thus preferred in academic prose: 70 percent of the academic texts in LSWE Corpus [=Longman Spoken and Written English Corpus] use *which* for restrictive clauses more commonly than *that*. In contrast, *that* has more informal, colloquial associations and is thus preferred in conversation and most contemporary fiction: 75 percent of the fiction texts in the LSWE Corpus use *that* for restrictive clauses more commonly than *which*."

(8) English, of course, traditionally, is a stress-timed language, a language **which** goes ti-tum, ti-tum, ti-tum, ti-tum, ti-tum, where the stresses fall at roughly regular intervals in the stream of speech. (FE)

(9) If you were the God of language, looking down on the earth and cho… choosing a language **that** was going to be a global language, you wouldn't choose English on linguistic grounds. (FE)

その他の例についても，使い分けの点ではっきりした差は見られなかったが，しばしば文法書でも指摘されるように，先行詞が限定的な修飾語句を伴う場合は，関係代名詞として that を用いるのが普通であるという傾向が見られる。この点は，先行詞が人の場合と同様である。以下の 4 文では，that が用いられている。波線で示した修飾語に留意されたい。

(10) If you trust the latest research **that** has been done into this matter, it seems that he spent one night with Gwyneth Paltrow. (FE)

(11) The only other country in the 19th century **that** was powerful enough to influence world economy was Germany. (FE)

(12) Think of all the irregularity in English spelling **that** has come from 600 years of influences from all other languages **that** have come into contact with it. (FE)

(13) Any language **that** is larger than any other language can, at some point or another, steamroll, if there is such a verb, the other languages out of existence. (LD)

ただし，先行詞が同様の修飾語句を伴う場合でも which を用いた例が 1 例見られた。

(14) All those languages of southern Africa **which** use clicks, you know… *[click sounds]* that sort of thing, in order to… as vowels… as consonants. (LD)

では，ここで，主語として機能するゼロ関係詞の唯一の例を見ておこう。(以下の例では，先行詞に 'all the' という修飾語句が付き，先行詞のすぐ後に there are が続いていることに留意したい。)

(15) And when you think of all the variations **<zero>** there are in the language, when you look at the house-style book of a publisher, you find that there are hundreds and hundreds of little rules and regulations that you have to follow. (IL)

there is/are で始まる節の頭で，関係代名詞が省略されている。これは主格の関係代名詞を省略することができる場合の 1 つである。[5] "That's all there is to it." (ただそれだけのことだ) という決まり文句にも見られる用法である。

[5] Cf. 安藤 (2005: 189).

2.2.2. 先行詞＝人以外：「動詞の目的語」の場合

表 3 では，which が 1 例だけ見られるが，他は that (44 例) とゼロ関係詞 (39 例) で，両者の間に大差はない。まず，例外的な which の例から見ておこう。

(16) Once upon a time, people like me used to get Christmas annuals in which there would be <u>puzzles</u> **which** you had to solve. (IL)

クリスタルの口調では，‘puzzles’ という先行詞の後にはっきりとした休止はなく，意味的にもこの which は制限用法の関係代名詞と解釈してよいと思われる。（あるいは，補足的に情報を付け加えるという意識が働いて，非制限関係詞節のように which を用いたのかもしれない。）

次に，that とゼロ関係詞の使い分けについて検討する。Biber (1999: 621) によると，関係詞節内の主語が名詞か人称代名詞かによって，目的語としての関係代名詞の用法に関して異なる傾向が見られる。

> In all registers, the zero relativizer is strongly favored by the presence of a personal pronoun as subject in the relative clause. This is because most pronouns distinguish between subject (nominative) and object forms (e.g. *I, she, he* v. *me, her, him*), and so the presence of a subject pronoun unambiguously marks the beginning of a new clause. Thus, these pronouns provide a grammatical clue for the beginning of the relative clause, even without the relativizer:… In contrast, a full phrase can fill many grammatical slots and thus provides no indication of a clause onset. As a result, the zero relativizer is strongly disfavored when a full noun phrase occurs as subject of the relative clause.

関係詞節内の主語が人称代名詞の場合は関係代名詞が省略され，一方，名詞の場合は明示される傾向がある。特に格変化がある人称代名詞 (*I, she, he, we, they* vs. *me, her, him, us, them*) の場合は，主格形であれば関係詞節内の主語であり，仮に関係代名詞が省略されていても関係詞節の始まりであることが明瞭である。

関係詞節内の主語は，名詞あるいは人称代名詞の場合に加えて，不定代名詞の場合もある。格変化がないのは名詞と不定代名詞，格変化があるのは人称代名詞である。（ただし，2 人称代名詞の ‘you’ は主格と目的格が同形。）

関係詞節内の主語が名詞，不定代名詞，人称代名詞の場合に分けて，that とゼロ関係詞の分布（生起数）を見てみよう。

表 4　制限用法：先行詞＝人以外　「動詞の目的語」の場合

	that	<zero>
関係詞節内の主語＝名詞	11	5
関係詞節内の主語＝不定代名詞	3	1
関係詞節内の主語＝人称代名詞	30	34

表4によると，関係詞節内の主語が名詞か不定代名詞の場合は，関係代名詞として that が多い。人称代名詞の場合は，that とゼロ関係詞がほぼ同数である。

第 1 に，関係詞節内の主語が「名詞」の場合について，関係代名詞として that が用いられた例をいくつか見てみよう。（関係詞節内の主語は波線で示す。）

(17) It can change in the patterns of discourse **that** people have. (IL)

(18) It's the language **that** most people use most of the time in the corridors of power, unless you bump into the French walking along that corridor. (FE)

(19) And she trained these parrots to speak the syllables of the dead language **that** parrots from 200 years ago spoke. (LD)

(20) But, just as one must respect the norms of standard English punctuation, and orthography generally, and respect them in those circumstances, one must also respect the informality **that** the internet situation permits you to use. (IL)

(21) And the more languages, the better, because each language is a new, unique experience, a new way of structuring expression **that** no other language has got. (LD)

関係詞節内の主語は，(17) people, (18) most people, (19) parrots from 200 years ago, (20) the internet situation, (21) no other language であり，その直前で関係代名詞の that が用いられている。

一方，関係詞節内の主語が名詞で，その直前でゼロ関係詞が用いられている 5 例について確認しておきたい。まず，5 例中の 3 例は，(22) に挙げたハイネケンビールの宣伝文句の繰り返しである。

(22) Heineken refreshes the parts **<zero>** other beers do not reach. (FE)

クリスタルによると，これはイギリスで 20 年以上にわたって人気を博したハイネケンの宣伝文句の原型である。[6]　これを振って，次から次へと新しいバージョンが生まれたとして，クリスタルは以下のような例に言及している。

[6] 実際の宣伝文句の原型は若干異なる。クリスタルが解説書に付した注釈を引用しておく。Cf. Crystal (2009: 14. s.v. *Heineken slogan*): "There was some variation in the phrasing, over the years, but the original slogan was 'Heineken refreshes the parts other beers cannot reach.' (I say 'do not' in the lecture).　It was devised by advertising copywriter Terry Lovelock in 1974.　The slogan was rested in 1989, with the restorative theme replaced by 'Only Heineken can do this,' but it returned for a while in 1991 as fresh as ever."

(23) Heineken refreshes the pirates **<zero>** other beers do not reach.
(24) Heineken refreshes the pilots **<zero>** other beers do not reach.
(25) Heineken refreshes the parrots **<zero>** other beers do not reach.

(23) から (25) においては，先行詞の位置で ‘parts’ の代わりに ‘pirates’, ‘pilots’, ‘parrots’ という語が用いられている。このうち，‘pirates’ と ‘pilots’ は人 (personal) であるが，‘parts’ と ‘parrots’ は人以外 (non-personal) の例である。関係詞節内の主語は ‘other beers’ であり，その直前の関係代名詞は省略されている。先行詞が人以外の場合に関しては，関係詞節内の主語が名詞であるにもかかわらず，ゼロ関係詞が用いられている点は一般的傾向と異なるが，これはクリスタル自身の言葉ではなく，宣伝文句の引用である。この文句を捩って，クリスタルはパフォーマンス講演 (“The Future of Englishes”) の中で次のように述べている。ユーモアが感じられる一節なので下に引いておく。（ハイネケンの宣伝文句を捩った箇所はイタリック体で示す。）

> It is the future of Englishes, not the future of English. And in order to see this future, one has to look at it, I think, from a cultural point of view. If I were to say next that we're in a theatre here on Euston Road in London, and next door is the British Library, *an organization that refreshes the parts other institutions do not reach*, how many of you recognize the allusion? Hands up if you do. *An organization that refreshes the parts that other organizations do not reach.* Half of you have put your hands up. That might be an age thing. Because what I'm referring to is an advertisement series that began in the early 1970s and went on for 20 years, one of the longest-running advertising series in British advertising history.

クリスタルが講演の冒頭部で, 会場近辺にある大英図書館 (the British Library) を意味して, “an organization that refreshes the parts other institutions do not reach” と述べる箇所である。この表現をもう一度繰り返しているが，2 度目では関係代名詞の that (目的格) を入れて “An organization that refreshes the parts **that** other organizations do not reach.” と言っている。DVD で視聴すると，2 度目は 1 度目以上に念を入れて明瞭に発音していることが分かる。統語構造の明確化のために，関係代名詞の that を挿入して，より分かりやすく表現していると考えてよいだろう。

クリスタルのパフォーマンス講演のうち，関係詞節中の主語が名詞の場合にゼロ関係詞が用いられた例は “The Future of Englishes” に限られ，いずれもハイネケンの宣伝文句，あるいはその応用形であった。それ以外では，同様の環境において，関係代名詞の that が用いられていることが分かった。統語構造の明確化が関与していると思われる。

第 2 に，関係詞節内の主語が「不定代名詞」の場合を検討する。関係代名詞は，that が 3 例，ゼロ関係詞が 1 例であった。

以下の 3 例では，関係詞節内の主語は (26) one, (27) nobody, (28) everybody であり，関係詞節の頭では that が用いられている。

(26) The impression **that** one gets that everybody speaks English is, of course, an impression upon one's travels around the airport lounges and the promenades and the restaurants and so on of the world. (FE)

(27) And these were words **that** nobody had ever seen in English before. (FE)

(28) Why do we need a global language? To talk to each other, to understand each other. For countries with different language backgrounds to have a lingua franca **that** everybody recognizes. (FE)

一方，次の (29) では，関係詞節内の主語は不定代名詞 any (of you) であるが，関係詞節の頭で関係代名詞が省略され，ゼロ関係詞の例となっている。

(29) And this is something **<zero>** any of you can do as an experiment. (IL)

第 3 に，関係詞節内の主語が「人称代名詞」の場合を検討する。関係代名詞は，that が 30 例，ゼロが 34 例であった。

主語が人称代名詞の場合は，that とゼロ関係詞の生起数に大差ない。例えば，以下の (30) と (31) では，that とゼロ関係詞の使い分けに関して特に有意な差は看取できない。

(30) I cannot even begin to repeat the kind of accent **that** she had. (FE)

(31) And he spoke it in a very distinctively German sort of way, I mean, this is the sort of thing **<zero>** he was saying all the time. (FE)

ただし，関係詞節が文の中間，すなわち主部に現れる場合 (9 例) について見ると，すべてにおいてゼロ関係詞が用いられている。

例をいくつか挙げておこう。（主部の後に来る述語動詞はイタリック体で示す。）

(32) The lowest estimate **<zero>** I've seen in, in recent times…I'm talking in 2008…*is* something like 350 million, and the highest estimate **<zero>** I've seen in recent times *is approaching* 500 million. (FE)

(33) An analogy **<zero>** I like to use *is* that of a wardrobe. (IL)

(34) The second thing **<zero>** we might try to do, though, *is* revitalize a language that is endangered. (LD)

(35) And the writing **<zero>** you saw *was* "What you see is what you get." (IL)

以上の用例において，関係詞節中の主語は I, we, you である。主部の中でゼロ関係詞が好まれる要因として，文の前半部が過重になるのを避けようとする意識が働いているのではないかと考えられる。

2.2.3. 先行詞＝人以外：「前置詞の目的語」の場合

表 3 によると，関係代名詞が前置詞の目的語として機能している例は計 22 例，関係代名詞別の生起数は which (10), that (6), ゼロ関係詞 (6) である。

ただし，関係代名詞と前置詞の語順が関係代名詞の選択に影響を及ぼすため，<前置詞＋関係代名詞> 型（“pied piping ”：随伴）か，<関係代名詞 … 前置詞> 型（“preposition stranding”：前置詞残留）に分けて生起数を示すと，以下の結果となる。

表 5　制限用法：先行詞＝人以外　「前置詞の目的語」の場合

	which	that	<zero>
<前置詞＋関係代名詞> 型	9	0	0
<関係代名詞 … 前置詞> 型	1	6	6

前置詞が前置される場合は which，後置される場合は that もしくはゼロ関係詞が普通である。以下，<前置詞＋関係代名詞> 型と <関係代名詞 … 前置詞> 型に分けて，例を見ることにしよう。

<前置詞＋関係代名詞> 型

9 例のうち，仮に前置詞を後置しても問題がないと思われるのは，下記の 1 例のみであった。

(36) So the next question is, how do you persuade people that language endangerment and language death is <u>something</u> to **which** they should contribute? (LD)

これについては，“something that they should contribute to” または “something **<zero>** they should contribute to” と表現することは文法上可能である。原文のように <前置詞＋which> という形式により，フォーマルな表現になっている。

他の 8 例については，前置詞の後置が不可であるか，あるいは，定型句的表現であるかのいずれかであった。まず，前置詞を後置することが困難であると考えられる 7 例を挙げる。

(37) They had a <u>campaign</u> in **which** they wanted to persuade the lager-drinking world that if they drank Heineken lager, then they would be rejuvenated individuals. (FE)

(38) Once upon a time people like me used to get <u>Christmas annuals</u> in **which** there would be puzzles which you had to solve. (IL)

(39) If I were to ask you, “What is the fundamental <u>property</u> of the internet, and especially of the World Wide Web, without **which** it could not exist?” you’d think for a moment and then after a while I think you’d probably come up with the concept of the hypertext link. (IL)

(40) Let me talk first of all ab…, about the <u>respects</u> in **which** it is revolutionary. (IL)

(41) And there are examiners and examining boards that are extremely worried about the way in **which** all these abbreviations are turning up in exams and about the low grades that the kids are getting as a result. (IL)

(42) And when you think about the possibilities, the way in **which** spoken language is going to become a dominant feature of the internet over the next 20, 30, 40 years, you realize that there's only one phrase that summarizes the relationship of linguistics and electronically-mediated communication, in relation to the future of language. And it's… "You ain't seen nothin' yet." (IL)

(43) They've always died since the beginning of language, one imagines, and if you look back at recorded history, you can see the extent to **which** death has taken place. (LD)

上例のうち，(41) と (42) の 'the way in which' や，(43) の 'the extent to which' などは，固定表現といってもよい。

また，定型句的表現として，下記の例があった。

(44) Within a hundred years or so of the British Empire evolving, people were talking about English as "a language on **which** the sun never sets". (FE)

(44) の "a language on which the sun never sets" は，"an empire on which the sun never sets" (日の沈むところなき帝国) という人口に膾炙した句に基づくと思われる定型句的表現である。

<関係代名詞 … 前置詞> 型

which は，(45) の 1 例のみであった。

(45) And here is a sentence in the English language **which** they understood the grammar of, "Heineken refreshes the pirates other beers do not reach." (FE)

(45) は，"a sentence … **whose** grammar they understood" と表現することも可能であろう。しかし，ここでは 'of which' の系列を用い，前置詞の 'of' を後置する形式によって表現している。[7] 目的格の関係代名詞として，that やゼロ関係詞ではなく，which が用いられているのは，先行詞の主要語である 'sentence' と関係代名詞の位置が離れていることが 1 つの要因と思われる。[8]

それ以外は，that とゼロ関係詞が同数で 6 例ずつあるが，使い分けの点で特に有意な差は見られない。

---

[7] whose / of which については，安藤 (2005: 184-185) や Quirk et al. (1985: 1249-1250) 等を参照。

[8] Cf. Quirk (1985: 1252): "When complex phrases or clauses intervene between the antecedent head and the relative pronoun, *which* is generally preferable to *that* and very much preferable to zero:…"

(46) And I guess I would be the same in America, not understanding the cultural background to a lot of slogans that are used over there, that might refer to baseball or anything **that** I don't understand about. (FE)

(47) This is the 19th century **<zero>** we're talking about now, really. (FE)

(48) And you do what you do, and the job of the copy editor is to consistentize your manuscript and, indeed, to present a house style **that** the publisher is confronted with. (IL)

(49) It sucks words in from every language **<zero>** it comes into contact with. (FE)

(46) と (47) では 前置詞の 'about' が，(48) と (49) では前置詞の 'with' が，文末に現れた例である。関係代名詞は，that かゼロ関係詞のいずれかが用いられている。

2.2.4. 先行詞＝人以外：「補語」の場合

関係代名詞が be 動詞の補語になっている例は，1 例のみであった。以下の (50) では，関係代名詞が省略されている。

(50) That's all **<zero>** it is.[9] (FE)

3. 文章体との比較

ここでは，クリスタルのパフォーマンス講演 (*The Future of Language*) と，クリスタルのいくつかの種類の文章をサンプルとして，関係代名詞の用法に関して比較検討してみたい。

3.1. *The Future of Language* の解説書との比較

第 1 節で述べたように，*The Future of Language* と題するクリスタルの講演集には，クリスタル自身による解説書が付随している。解説書の本文 (140 ページ) のうち，文化および語法に関する注 ("Cultural and usage commentary") と課題 ("Activities in the classroom") を除き，普通の散文体で書かれた解説 (約 40 ページ) を対象として，関係代名詞の用法を調査した。

ここでは，文体によって関係代名詞の用法上の差が生じやすい「制限用法：先行詞＝人以外の場合」に限って，パフォーマンス講演と解説文とにおける結果を示したのが表 6 と表 7 である。（表 6 は，2.2. で表 3 として挙げたものを，比較の便のために再録した。） なお，以下では，「主語」，「動詞の目的語」，「前置詞の目的語」としての働きごとに，生起数

[9] 「ただそれだけのことだ」の意。'robot' という英語が，南アでは「自動交通信号機」の意味で使われるという件の一文。内容的に興味深いので前後を引用し，当該の文を下線で示す。 I remember the first time I went to South Africa, and we were driving along, and a sign in front of us said, "Robot ahead." *(laughter)* "Have they landed? *(laughter)* Robot ahead? What's a robot?" say I to the driver. And he says, "It's a traffic light." "Yeah? That's all. It's a traffic light. Yeah?" A robot is a traffic light. That's all it is. Wow. And it's used in South African English, and also in Zimbabwe and areas like that. (FE)

が多いものを網かけで示す。

表 6　【*The Future of Language*: パフォーマンス講演】
制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	33	64	1	98
O.v.	1	44	39	84
O.prp.	10	6	6	22
C	0	0	1	1
合計	44	114	47	205

表 7　【*The Future of Language*: 解説書】
制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	46	13	0	59
O.v.	3	5	17	25
O.prp.	10	0	1	11
C	0	0	0	0
合計	59	18	18	95

資料のサイズが同等でないため単純比較はできないが，両者の間には関係代名詞の選択に関してかなりの差が見られる。「主語」の場合，パフォーマンス講演では that が優勢であったのに対して，解説書では which が優勢であり，明らかに逆の傾向を示している。「動詞の目的語」に関しては，パフォーマンス講演では that とゼロ関係詞の生起数にあまり差がなかったのに対して，解説書ではゼロ関係詞が優勢である。「前置詞の目的語」に関しては，パフォーマンス講演では which が優勢であるものの，that とゼロ関係詞も少なからず見られたのに対して，解説書では which がほぼすべてである。また，合計で見ると，パフォーマンス講演では that が優勢 (205 例中 114 例 : 56%) であったのに対して，解説書では which が優勢 (95 例中 59 例 : 62%) である。以上を要すると，パフォーマンス講演は，解説書に比べて，よりインフォーマルな特徴を示しているといえる。ただし，「動詞の目的語」に関しては，解説書では，一般に最もインフォーマルな形式と考えられているゼロ関係詞が他の 2 者に比べてかなり多いのに対して，パフォーマンス講演では，that がゼロ関係詞よりもむしろやや多く用いられている点が注意を引く。語りの中で口調が関係しているのではないかと思われるが，今回の調査ではこの点について明確な解答を得ることはできなかった。今後の課題としたい。

3.2. *Begat: The King James Bible and the English Language* との比較

他の文章の例として，クリスタルの最近の著作の中から，*Begat: The King James Bible and the English Language* (2010) を選び，試みに 50 ページ分 (pp. 1-50) を調査した。本書は『欽定英訳聖書』からの引用句に関する論考である。関係代名詞の調査対象としては，聖句や他からの引用文を除外し，クリスタルの地の文に限った。

制限用法で，先行詞が人以外の場合について，関係代名詞の分布（生起数）は表 8 のとおりである。

表 8　【*Begat : The King James Bible and the English Language*　文章】
制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	35	12	0	47
O.v.	1	4	14	19
O.prp.	8	1	0	9
C	0	0	0	0
合計	44	17	14	75

「主語」では which が優勢,「動詞の目的語」ではゼロ関係詞が優勢,「前置詞の目的語」では which が優勢である。また，合計で見ると，which が優勢 (75 例中 44 例 : 59%) である。これらは 表 7 の解説書と同様の傾向であり，パフォーマンス講演とは異なる特徴となっている。

3.3. *A Little Book of Language* との比較

また，クリスタルの最近の著作の中から，平易で，語りかけるように書かれた文章の例として，*A Little Book of Language* (2010) を資料に 50 ページ分 (pp.1-50) を調査した。本書は，本来は 10 代の少年少女向けに書かれた「ことばの世界への誘い」とも呼びうる啓蒙書である。学術書とは異なり，全般的に柔らかい文体で書かれている。（引用文や例文は，関係代名詞の調査対象外とした。）

制限用法で，先行詞が人以外の場合について，関係代名詞の分布（生起数）は表 9 のとおりである。

表 9　【*A Little Book of Language*　文章】
制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	15	18	2	35
O.v.	0	10	39	49
O.prp.	3	1	2	6
C	0	0	0	0
合計	18	29	43	90

「主語」では which と that が拮抗し，「動詞の目的語」ではゼロ関係詞が優勢，「前置詞の目的語」は用例数が少ないため傾向についての判断はできないが，収集例の中では 3 者に確たる差はない。文章体といえども，表 7 や表 8 に比べると，「主語」では that の割合が高い。この点では，パフォーマンス講演の場合により近い。また，合計で見ると，ゼロ関係詞が優勢 (90 例中 43 例：48%) である。これらのことより，本書は，関係代名詞の使用の点で，よりインフォーマルな特徴を示しているといえる。

3.4. 原稿を読むタイプの講演との比較

最後に，パフォーマンス講演との対比で，用意した原稿を読むタイプの講演 (scripted lecture) の例として，クリスタルの “On Anniversaries” と題する講演を資料に関係代名詞の使用状況を調査した。本講演は，2009 年 9 月 27 日に，ケンブリッジ大学出版局 (Cambridge University Press) の 425 周年を記念して行われたものである。（インターネット上で公開されている。“David Crystal lecture”: http://www.sms.cam.ac.uk/media/651705）[10]

司会者による冒頭の紹介を除き，講演の長さは 60 分弱である。限られた用例数であるが，制限節で，先行詞が人以外の場合の関係代名詞の分布（生起数）は表 10 のとおりである。

表 10　【“On Anniversaries”　原稿を読むタイプの講演】
制限用法：先行詞＝人以外の場合

	which	that	<zero>	
S	11	10	0	21
O.v.	3	3	3	9
O.prp.	10	0	0	10
C	0	0	0	0
合計	24	13	3	40

「主語」では which と that がほぼ同数，「動詞の目的語」では 3 者が同数，「前置詞の

[10] 「千葉大学言語教育センター　海外大学講義集」では，本講演のトランスクリプトも提示されている。http://english-chiba-u.jp/youtube/contents/74.html

目的語」では which のみである。合計で見ると，which が優勢 (40 例中 24 例：60%) である。パフォーマンス講演とは，特徴が異なる。「主語」に関しては *A Little Book of Language* の場合に近く，「前置詞の目的語」，および合計に関しては，パフォーマンス講演の解説書や *Begat: The King James Bible and the English Language* の場合に近い。つまり，講演とはいえ，関係代名詞の選択の点では，書き言葉に近い特徴を示しているということができる。

4. おわりに

以上，クリスタルのパフォーマンス講演を主たる資料として，関係代名詞の用法について検討した。同一人でありながら，文章体の場合に比べると，パフォーマンス講演では，関係代名詞の用法に関して，よりインフォーマルな傾向が見られた。また，かなり限られた範囲での比較であったが，同じく講演とはいえ，原稿を読むタイプの講演に比べると，やはりパフォーマンス講演は，関係代名詞の用法に関して，よりインフォーマルな傾向を示している。

文章体についても，平易に書かれた啓蒙書と，一般の啓蒙書や学術書とでは，同一著者の手になるものであっても，関係代名詞の用法に関して文体差が見られた。

小論は，同一人の中で，関係代名詞の用法に関して，使用域による違いが生ずるのかいなかを探るパイロットスタディーに過ぎないが，資料の幅をさらに広げることにより，明確な傾向をとらえることが可能であろう。幸い，クリスタルは広範囲にわたって多作であるので，言語に関する専門書や啓蒙書ばかりでなく，紀行文や自伝も最近の著作の中にある。[11] また，書き言葉とはいえ，インターネット上のブログの場合には，何らかの異なる特徴が見られるかもしれない。それについては，クリスタルのホームページにある “David Crystal’s Blog” (http://david-crystal.blogspot.com/) が資料となろう。講演は，今後，さらにインターネット上で公開されることも予想されるが，現在でも，インタービューや自著紹介であれば，インターネット上の YouTube でクリスタルの口語資料を得ることができる。

英語の関係詞の用法は，通時的に見ると，古英語以降，近代英語に至るまで，かなり大きく変化した。現代英語では一見安定しているように思えるが，実際の用法には揺れがあり，現代英語の文法変化を実証的に論ずる Leech (2009) の中でも，関係詞節がテーマの一つとして取り上げられている。同書 (pp. 226-235) によると，英語の書き言葉の口語化 (colloquialization) の流れの中で，書き言葉における関係詞の用法がよりインフォーマルな傾向を示している。すなわち，*wh*-関係詞の使用が減少する一方で，that とゼロ関係詞が増加し，また，前置詞と関係代名詞の位置に関しては，<前置詞＋関係代名詞> 型が減少して，<関係代名詞 … 前置詞> 型が増加する傾向がある程度見られるようである。

また，当然ながら個人差もあるだろう。現代英語の関係詞の用法については，多角的な視点から，さらに実証的な研究を深める余地が残されているといえよう。

---

[11] 旅行記として，*By Hook or By Crook: A Journey in Search of English* (HarperCollins, 2007). 自伝として，*Just a Phrase I’m Going Through: My Life in Laguage* (Routledge, 2009).

参考文献

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』, 開拓社.

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education.

Crystal, David (2004) *Making Sense of Grammar*, Peasron Education.

Crystal, David (2009) *The Future of Language: The Routledge David Crystal Lectures*, Routledge.

Crystal, David (2010) *A Little Book of Language*, Yale University Press.

Crystal, David (2010) *Begat: The King James Bible and the English Language*, Oxford University Press.

Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair and Nicholas Smith (2009) *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*, Cambridge University Press.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.